

# 姫路市芸術文化賞を受賞した 女流陶芸の第一人者

平成30年度の第41回姫路市芸術文化賞を受賞した原田隆子さん。陶芸の世界ではつとに名の聞こえた女流陶芸家です。

幼い頃から母親の影響で茶道に親しみ、大阪のデパートで松江市・袖師窯の尾野敏郎氏の作品展を見たのがきっかけで弟子入りしましたが、伝統陶芸だけでは飽き足らず、前衛陶芸に自らの夢を見出し、昭和46年に日本陶芸展に入選。同50年には日本初の女流陶芸家集団として知られる「女流陶芸」の会員となり、文部科学大臣奨励賞等々、受賞を重ねました。

その原田さんが最も多忙だったのが60才代。平成に入ってからで、地元の山陽百貨店をはじめ大阪高島屋、京都大丸、神戸そごう、東京池袋東武百貨店などの美術画廊で次々と個展を開催しました。

こうした全国をまたにかけた活躍とともに、時代時代によって作風が大きく変わっていくのが原田さんの作陶の特徴で、昭和40～50年代頃の前衛的なオブジェのような作品から、近年の金箔銀箔が入った釉薬を使う金銀彩まで、絶えず変化してきており、「年を重ねると体力も落ち感性も鈍ってくるので、新たに作品を作っていく過程は失敗の連続ですが、失敗を恐れていては前進もないですよ。これからはゆっくりと、質の良い作品を作っていきたい」と話します。

どの作品にも思い入れがあるが、一番うれしかったのは京都の淡交社主催の「'92淡交ビエンナーレ 茶道美術公募展」に出品した金銀彩の茶碗「風光」が「淡交社賞・奨励賞」を受賞したこと。裏千家の鵬雲斎家元（大宗匠・千玄室氏）から書付もいただき、脳梗塞で臥せっていた父親が「お前もやっと……」と認めてくれたそうで、「この受賞でようやく陶芸を一生の仕事にしていけるんじゃないかと、灰かな明かりが見えた気がしました」と振り返ります。

そして平成26年には春のヤマザクラなど、季節ごとに装いを変える夢前川対岸の山にヒントを得て、3点の筒状の陶器に異なる色の釉薬を掛け分けてピンク・青・黄に染め上げた「遠山彩々」で第48回女流陶芸河北記念賞を受賞。益々の活躍を見せていますが、これからは自身の作陶生活の原点でもある茶道具、特に茶碗に力を入れていきたいと話す原田さん。昭和59年からは市内で陶芸サークル「<sup>かくようかい</sup>赫窯会」を主宰。生徒の個展を開くなど、後進の育成にもあたっています。



陶芸家

はら だ たか こ  
原田 隆子 さん

表紙  
解説

姫路市立美術館

チームラボ《世界は暗闇から生まれるが、それでもやさしくうつくしい》2018年  
「チームラボ 世界は暗闇から生まれるが、それでもやさしくうつくしい」出品作品

会期：6月16日(日)まで

チームラボは、2001年から活動を開始したアートコレクティブ。集団的創造によって、アート、サイエンス、テクノロジー、デザイン、そして自然界の交差点を模索している、学際的なウルトラテクノロジスト集団です。アーティスト、プログラマー、エンジニア、CGアニメーター、数学者、建築家など、様々な分野のスペシャリストから構成されています。

この作品《世界は暗闇から生まれるが、それでもやさしくうつくしい》では、人々が文字に近づくと、その文字がもつ世界が表れ、世界を創っていきます。そして、世界の中で互いに影響し合います。投影された世界の裏側には、360度広がる空間があり、文字から生まれたものたちは、空間上のそれぞれの位置や、それぞれが持つ知能や関係性、物理的な影響などによって、互いに影響を受け合いながら、空間上でリアルタイムに計算され、複雑かつ自然な世界を創っていきます。例えば、風が吹けば、風の物理的な影響を受け、蝶は火が嫌いですが、花は好きで近づいていきます。自然の景色に同じ瞬間がないように、同じ瞬間は二度となく、常に初めて見る景色を創り出すのです。

漢字が亀の甲羅や牛や鹿の骨、青銅器に刻まれていたころ、漢字の一字は、ひとつの世界を持っていました。漢字を通して人々が呼び出した世界は、連続し、互いに相互作用を与えながら創られていきます。